

研究ノート

室内装飾としての衣服：絵巻物における衣架の表現とその不在

中 井 真 木
NAKAI Maki

はじめに

衣架という調度がある。文字通り、衣を架けるためのもので、日本では遅くとも平安時代より、公家や武家の上位層の調度として使われていたことが、文献史料から伺える。そしてそれは、単に衣を掛けておくだけの道具ではなく、室内装飾の一部でもあった（澁澤 1984：第4巻 252；鈴木 1996；小泉 1998：377 等）。

例えば『源氏物語』葵の末尾、新年に源氏が亡くなった葵の上の部屋を訪れる場面では、「御しつらひなども変らず、みぞかけの御さうぞくなど、例のやうにしかけられたるに、女のが並ばぬこそはえなくさうざうしけれ」と、「みぞかけ」に掛けられている新年の衣装の中に女物がないことを述べて喪失感を描写している（紫式部 1995：78）。「みぞかけ（御衣掛）」は、平安時代中期の辞書『和名類聚抄』の調度部「衣架」の項目に「和名美曾加介」とあるように（源順 1971）、衣架のことで、衣架とそこに掛けられた装束（衣服）が「しつらひ」、すなわち室内装飾の一部として用いられていたことが知られる。

布地を室内装飾に使用することは多くの社会で見られる行為であるが、衣架を用いることで着用する衣服を室内装飾に利用することはその特殊形態であり、日本を含む東アジアの興味深い文化と見なせる。しかし、管見の限りでは中世以前の日本の衣架について、総合的な分析は未だなされていないようである。その一因として、実際にどのように用いられていたのかを伝える絵画等の非文字資料が少ないことがあげられよう。絵巻物に見られる建築や調度類をインデックス化している『絵巻物による日本常民生活絵引』（澁澤 1984、以下『絵引』とする）でも、取り上げられているのは「衣桁」2例、「衣紋竹」「掛竿」各1例のみである⁽¹⁾。しかし、少ないとはいえ皆無ではない。また、描写がないとすればその意味も考えてみる必要があるだろう。そこで小稿では、中世以前の衣架のありようを探る第一歩として、『新修日本絵巻物全集』（角川書店）および『日本絵巻大成』シリーズ（中央公論社）の複製図版の助けを借り、代表的な絵巻物において衣架がどのように表現されているのか、あるいはまた表現されていないのかを探ってみたい。

I 衣架とはどのようなものか

絵巻物の分析に入る前に、中世以前の衣架について、現代の辞典類や文献史料からわかることをお

おまかにまとめておこう。

(1) 名称について

上で『絵引』にて「衣桁」、「衣紋竹」、「掛竿」が取り上げられていると述べたように、現代の辞書類では、衣を掛ける調度の名称として、「衣架」や「みぞかけ」よりも「衣桁」や「衣紋掛」等が広く用いられている。試みに『日本国語大辞典』で「衣架」を引いてみても、「いこう（衣桁）」に同じ」とある。しかし、その用例を見る限りでは、「衣架」は10世紀、「みぞかけ」は8世紀頃まで遡れる語であるのに対し、「衣桁」は室町時代以降の単語である。「衣紋竹」「衣紋掛」に至っては近世末期以降の用例しかあげられておらず、かなり新しい語である可能性が高い。

衣を掛ける調度の名称は上記に留まらない。『日本国語大辞典』の項目だけでも、「さお」「ころもざお」「かけざお」「衣紋竿」「釣衣桁」「ならし」等、数多くの語が見える。この中で「さお（さを）」については12世紀の用例が確認でき、比較的古い名称であるようだ。そして、用例を精査したわけではないが、鎌倉時代以前には主に「衣架」、「みぞかけ」および「さを」と呼ばれていたらしいことは文献史料から得る感触でもある。これらの言葉の語義・用例や変遷については小稿の範囲を超えており、今後の検討課題であるが、絵巻物という平安時代から室町時代にかけて興隆した絵画を対象とした今回の分析では、同時代に主に使用された名称として「衣架」や「竿（棹）」を用いるのがより適切であると思われる。

(2) 形状について

鈴木（1996）は衣桁を「室内に配置して衣服をかける器具」と定義し、組違えの土居に鳥居形の枠を据えた木製漆塗りの調度であることを解説した上で、熊野速玉大社古神宝として伝わる「上長押から紐で枠を吊り、二段に懸竿を通した懸衣桁」という形式も存在することを示している⁽²⁾。一方、『絵引』では、鳥居形の他に「一本の竿の両端を紐でくくって吊りさげる」衣桁が民間にあることを解説し、これが「衣紋竹」また「ならし」と呼ばれたことを述べる（澁澤1984：第4巻252）。これらの解説に見えるように、衣架には大きくわけて、床に設置する鳥居形のものと、長押などから竿を吊す形式のものがあつた。

鳥居形の衣架の形状を詳しく伝えるのが、12世紀中頃に編纂された、儀式の際の準備に関する資料をまとめた『類聚雑要抄』である。『類聚雑要抄』巻4では母屋や廂の間に置く調度が詳しく説明されているが、衣架についても指図入りで取り上げられており、多くの辞書や注釈書が衣架（衣桁）について述べる際に引用するところである。これによれば、衣架は土居に2本の柱を立ててそこに2本の横木を鳥居形に渡したもので、高さ5尺余り、長さ7尺、漆塗りや時に蒔絵を施し、金物で飾られ、1双で用いたものであつた（川本1998：195）。また、『類聚雑要抄』には、実際の儀式に際して用いられた、鋪設すべき空間の指図がいくつも収められているが、巻2に収録されているものの中には衣架を設置する位置が示されているものがあり、巻4に見える衣架がどのように用いられたかを知るよすがとなっている（川本1998：156-157, 160等）。

巻2の指図の中には、鈴木（1996）の言う「懸衣桁」に類似する、「二階棹」と注記される調度を書き込んだものもある。すなわち、永久3年（1115）7月21日、関白藤原忠実が東三条殿に移徙し

た際の記録のうち、東三条殿二棟指図と台盤所廊指図がそれであり、壁に接する2本の縦棒に2本の横棒が井桁に交叉するように描かれている（川本 1998：161-162）。二棟廊の指図の注記中には「以丸懸」とあるが、語註によればこれは「鉤丸という U 字形の金具をかけて棹を吊す」ことを意味し（川本 1998：236）、この「二階棹」が長押から吊す形式の衣架であることは確かであろう。指図中に上述の『絵引』で解説されるような1本の竿から構成される衣架は登場しないが、「二階棹」というからには「一階」の棹もあったものかもしれない。

鳥居形と「懸衣桁」形の衣架が、当時、同じ名称で呼ばれたのか、あるいは区別があったのかは定かでないが、この『類聚雑要抄』の記述を根拠として、以下の記述で両者を区別する必要がある際には、便宜上、鳥居形のものを「（鳥居形）衣架」、懸衣桁形のものを「棹」と表記することとした。

（3） 使用について

『類聚雑要抄』の指図の他にも、公家の日記や儀式書、文学作品等の室内描写において、衣架や棹の記述は散見される。これら文字資料についての詳細な分析も本誌の趣旨から外れるものであるから、ここでは一例として12世紀後半に源雅亮が記した有識故実書『満佐須計装束抄』の記述のみを取り上げたい。『満佐須計装束抄』上巻には寝殿の室内の調べ方についての詳細な指示が書かれているが、衣架についても、御簾、壁代、簾や畳、二階厨子等の調度、御帳等の鋪設の指示に続いて記述がなされている。

つねならず、帳の東の間に、東にそへて衣架二つを北南に立てゝ、そのうしろに五尺の屏風を三帖立つべし。前に畳二枚を敷くべし。つねは、衣架一つを立てゝ、屏風も一帖立てゝ、畳一枚敷く、常の事なり。御装束を掛くことあらば、まづ御袴を衣架の下層に、南に向けて右を上にしたゝみて、腰引き延べて掛くべし。上の層に、御衣に表着・打衣・小褂一つを重ねて例の衣たゝむやうに背折りにして、右を上にて打ち掛くべし。掛くる程、御袖三寸ばかりを見せて掛けよ。いたく見ゑぬれば悪し。もし御唐衣あらば、それをもたゝみて御衣の上に掛くべし。御裳あらば、二重に押し折りて、御袴に並べて掛くべし。もしこの御衣架、外に立つことあらば、いかさまにも北に御枕をも向け、又たゝみやうをも向けて掛くる事あるべからず。いかさまにも便宜⁽³⁾によるべし。（源雅亮 1950：10）

すなわちこれは鳥居形衣架について記述したものであり、特別な場合には2つ、通常は1つの衣架を寝殿の御帳の東の間に南北方向に立てることが指示されている。このように御帳に隣接する空間に衣架を設置することは『類聚雑要抄』所収の指図にも描かれており、一般的な作法であったようだ。そして、ここに衣服を掛ける場合には、2層になっている横木の下層に袴や裳、上層に上衣を重ねてたたんで掛けるよう示されている。掛けられる衣服はその部屋を使用する主人にふさわしい豪華なものであったと推測され、また、掛け方の細部にまで神経を使って美しく飾るものであったことが伺われる。なお、ここで記されているのは女性の衣服を掛ける場合であるが、冒頭で取り上げた『源氏物語』や公家の日記等から明らかのように、男性のものや、男女両方の衣服を掛ける場合もあった。⁽⁴⁾

Ⅱ 絵巻物における衣架の表現

前章で概観したように、中世以前の衣架には鳥居形の衣架と吊り下げる棹形式のものがあり、いずれも室内に設置して衣類を掛けて実用に供するだけでなく、室内装飾として使用されていた。それでは、これらの衣架は絵巻物の中でどのように描写されているだろうか。今回の調査では、『新修日本絵巻物全集』（角川書店）および『日本絵巻大成』シリーズ（中央公論社）に収録されている絵巻物を対象として、衣架の表現を搜してみた。

（1）鳥居形衣架

鳥居形の衣架が描かれた絵巻物は少なく、明確にそれと判別できるものは、わずかに3例であった。

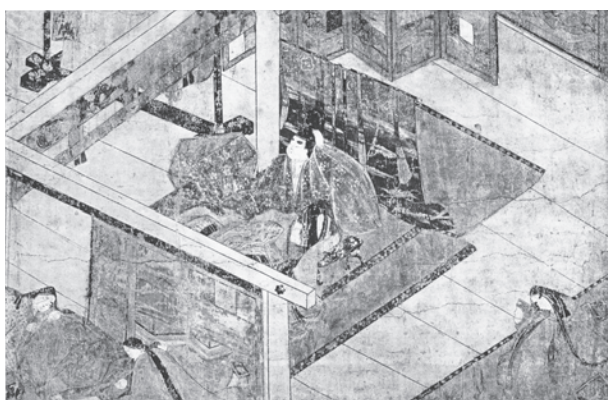


図1 『葉月物語絵巻』 絵第1段（稲本1988：口絵）

① 『葉月物語絵巻』

『葉月物語絵巻』は、もともとの全体構成がどのようなものか判然としないものの、ある物語（あるいは複数の物語）の6つの場面が描かれた絵巻で、絵は12世紀、詞書は14世紀前半のものと推定されている。衣架が見えるのはその絵第1段、下京の女のもとを男が訪ねる場面である（図1）。画面中央に袈姿の男と、重ねた衣を肩からすべらせて上半身は単衣ばかりになった女が座っている。画面左奥へ向けられた

男の視線の先には黒塗りに金で菊の蒔絵が施された衣架が置かれ、衣架には右から指貫、直衣、赤の衣（単か）が掛かっているのが見える。残念ながら衣架の上部は画面外にあり形がわからないが、下部は『類聚雑要抄』に示されているとおり、土居に2本の柱を立てた構造になっている。なお、稲本（1988：13）によれば、調度品の金蒔絵は補筆によってより鮮明に描き直された可能性があるという。

この衣架の描写は、詞書の「かの御装束、掛け置きたまへるを見たまひて、殿の、人知れず思す、重ねてもいかが着るべき紫の ゆかりは分かぬ衣なりとも」（西1996：二一三）という内容に対応するもので、男は掛かっている装束を見ながら、複雑に入り組んだ男女関係をめぐって「どうしようか」と思い悩んでいるところである。多くの注釈では、男が眺めている装束は彼自身が着てきたものであると解釈しているが（徳川1978：104；久保1991：70等）、西（1996：七一九）は、そうではなく、女が訪れてくる男のために準備したものであるとした。すなわち、詞書冒頭部に「わざとならねど、御直衣・指貫ばかりぞ『人知れぬ頭はれ衣に』とさへ思しいそぐ」（西1996：二）とあるのを、通説では「殿は殊更の身繕いとてなさないが、御直衣・指貫だけは、『人知れぬ頭はれ衣に（他人には知られず恋しい相手だけにこの思いが伝わる、そんな衣として）』とまでお思いになって格別のものをお召しになり、急ぎおいでになる」（久保1991：70）等と解釈しているが、西説では「大袈裟でないけれど、（男君が着る）御直衣・指貫ばかりは『他の人に知られることなく（男君にだけ自分

の想いが) 顕われる衣裳に (仕立てよう)』とまでお思いになり用意なさる」(西 1996: 八) と解釈し、これに伴って、後半の「かの御装束、掛け置きたまへる」の解釈が変わってくるのである。

この場面の解釈は、衣架の機能を考える上でも参考となる問題である。『枕草子』「心にくきもの」に「(女房の局を訪れている男の) 直衣、指貫など几帳にうちかけたり」(清少納言 1997: 332) とあるように、訪ねてきた男がその衣服を部屋のどこか(『枕草子』の例では几帳)に掛けておくことはあったが、『蜻蛉日記』に描かれるように(藤原道綱母 1995: 109-110, 192 等)、女が男のために衣服を整えることも日常的に行われていたから、この点からはどちらの解釈も成立し得る。筆者は詞書の解釈について結論を下す文学上の決定的根拠を持たない。しかし、絵の中で直衣や単、指貫が整然と衣架にかけられていることや、歌の解釈の整合性からは西説のほうに魅力を感じる。なお、『日本絵巻大成』等のカラー図版では直衣の色は判然としないが(白く見えるのは料紙に施された雲母と見られる)、徳川(1978: 104)は「二藍の直衣・指貫」、稲本(1988: 14)は顔料・色料名を使って「朱の直衣と群青の指貫」としている。紋様等の判読も含め、今後の画像分析の進展により新しい知見が得られることを期待したい。

②『慕帰絵』

本願寺3世覚如の伝記を描く14世紀半ば成立の『慕帰絵』では、巻1の第24紙に衣架が描かれている(図2)⁽¹⁾。これは13歳の覚如が山門の僧宗澄のもとで天台宗を学んでいる場面である。画面中央、宗澄と覚如が向かいあって座っている部屋から奥に続く間に、衣架が立てられ、僧服が掛けられているのが、開いた障子から部分的に見えている。しかしこの例も土居と衣服の裾だけが描かれているため、衣架の全体像は不明である。また、衣架がこの場面において果している役割は定かではない。



図2 『慕帰絵』巻1第24紙(部分, 小松 1985)

③『うたたね草紙』ポストン美術館本

室町時代の物語である『うたたね草紙』のうち、白描の絵詞を持つポストン美術館本の下巻第6紙(第3段後半)に衣架が見える(島田 1981; Museum of Fine Arts, Boston)。同系統のフリア美術館本にも同じ場面が見えるが(檜崎 1957)、彩色のある絵を持つ国立歴史民俗博物館本の系統は全く絵が異なり、衣架も描かれていない(米倉 1992)。

これは、夢で出会う左大將を想って病まで得た主人公の姫君が、石山寺に参籠し、隣室にその左大將がいるのを見ろという場面で、衣架は姫君の部屋、左大將の部屋と隔てる障子のそばに置かれ、着用時のように重ねられた状態の女房装束が上の横木に掛けられている。装束に隠れて構造ははっきりとしないが、横木は1本しかないように見える。この場面での衣架の役割はわからない。しかし、衣架の真上に書き込まれた絵詞に「こはいかにありし夢のおもかけに 露もたかへぬハ 又これも夢やら

ん」(島田 1981: 79, 下線は引用者)とあるのを見ると、詞中の「いか」にかけた駄洒落的な構図ともとれる。

なお、以上の3例は、いずれも据え置いて用いる形の衣架であることは確かだが、構造が完全には明らかでなく、上部の横木が2本であるか、あるいは近世絵画等に例があるように1本であるかはわからない。特に『うたたね草紙』の例は1本の横木を持つ構造のように見受けられる。

(2) 棹

一方、棹についてはより多くの例が見出せた。

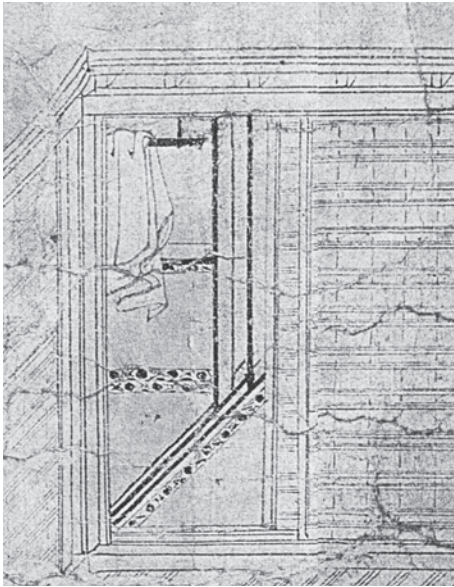


図3 『西行物語絵巻』徳川美術館本第10紙
(部分, 小松 1979b)

①『西行物語絵巻』徳川美術館本

西行の物語を描く『西行物語絵巻』のうち、徳川美術館所蔵本は13世紀中頃の成立と目される現存最古本の一部である。その中で、西行の嵯峨での出家の場面における嵯峨の聖の僧房の一室(第10紙, 図3)と、それに続く第11紙に描かれている建物の入口近くの2ヶ所に、上から吊された衣架にたたまれた白い衣類が掛けられているのが部分的に見えている。錯簡があるために後者の建物は何であるか定かではないが、円頭の人物が立ち働いていることから、僧侶の住まいであろうか。衣架はいずれも上部が隠れているため、棹が1本なのか2本なのかはわからないが、前者は棹が黒塗りであることが確認できる。

②『伊勢新名所絵歌合』

13世紀末の成立と推定されている『伊勢新名所絵歌合』の下巻第8・9紙には、螢飛ぶ河辺里の夏の風景が描かれているが、その左端に1軒の家が吹抜屋台で描かれている。中には化粧をする女性と侍女がいるが、その壁には端に金色の金物をはめた1本の黒塗りの棹が紐で吊られ、たたまれた白い衣が掛けられている⁽⁶⁾(図4)。棹の下には衾や枕が散らかり、ここが寝所であることがわかる。女性はそれなりの身分ではあるようだが、決して富貴を極めたような風情ではない。

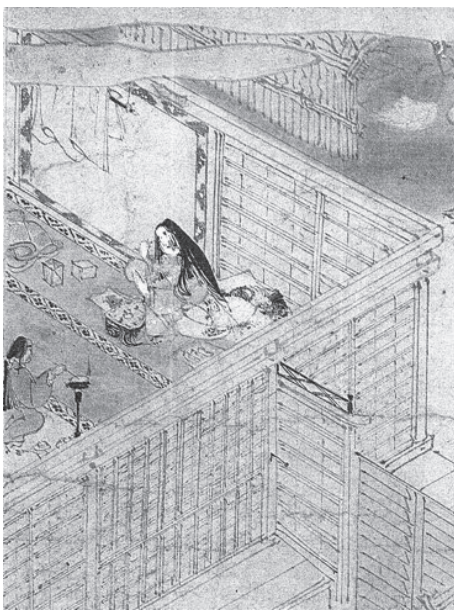


図4 『伊勢新名所絵歌合』下巻第8・9紙(部分, 小松 1978b)

③『春日権現験記絵』

春日明神の様々な霊験を描く14世紀初頭成立の『春日権現験記絵』にも、棹1本の衣架が見える。すなわち、巻14の第2紙、『唯識論』が火難を遁れた霊験譚の場面で、僧が

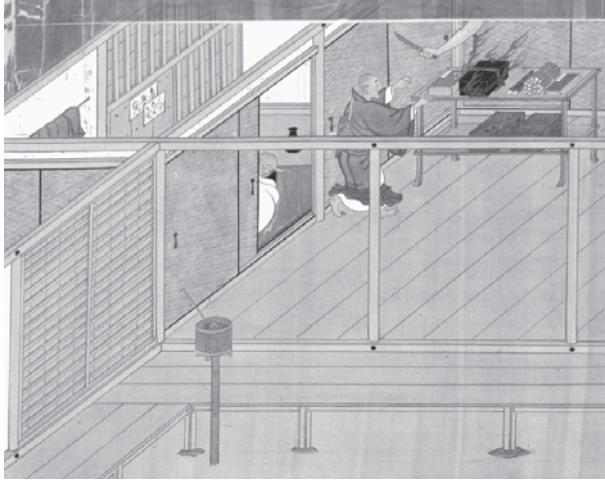


図5 前田氏実・永井幾麻模写『春日権現霊驗記』（模本）巻14第2紙（部分），東京国立博物館所蔵 Image: TNM Image Archives Source: <http://TnmArchives.jp/>

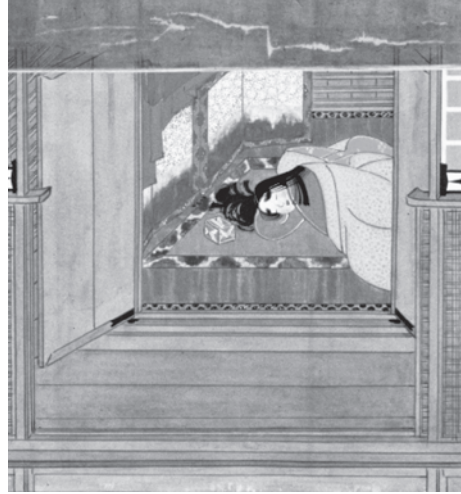


図6 前田氏実・永井幾麻模写『春日権現霊驗記』（模本）巻7第10紙（部分），東京国立博物館所蔵 Image: TNM Image Archives Source: <http://TnmArchives.jp/>

寝ている左手の部屋の左の壁に衣架が吊られ、僧服とおぼしき衣服がたたんで掛けられている（図5）。

また同絵巻には、衣架は見えないものの、衣架に掛けられた衣を描写しているとおもわれる場面がある。巻7の第10紙に描かれる、藤原隆季家の女房、五条局の居室がそれで、寝ている五条局の枕元に左手の壁に沿って屏風が立てられ、その上に重なるようにして、上方から吊されている紅の袴と紫の衣が見える（図6）。『絵引』ではこの描写を「屏風に衣装をかけている」ものと解釈しているが（澁澤1984：第4巻200），実際には屏風の上端が一部、袴の手前にきており、衣類は衣架に掛けられているものと推測される⁽⁷⁾。

④『融通念仏縁起』

原本は14世紀初頭に成立した、融通念仏の祖良忍の伝記と念仏の功德を描く『融通念仏縁起』では、クリーブランド本（下巻）第24紙，木寺の源覚僧都の牛飼童の妻の難産を描く場面で、産室の壁に1本棹の衣架が吊され、白衣が掛けられている（小松1983）。

⑤『慕帰絵』

巻8の第5紙，大原の勝林院の様子を吹抜屋台で描く場面の右端に、床は見えぬ壁と御簾のみが見える一部屋があるが、その壁に1本棹の衣架を紐で吊し、たたんだ衣とおぼしき布地が掛かっている（図7）。部屋の用途は明確ではないが、『絵引』はこの場面をかけ竿および

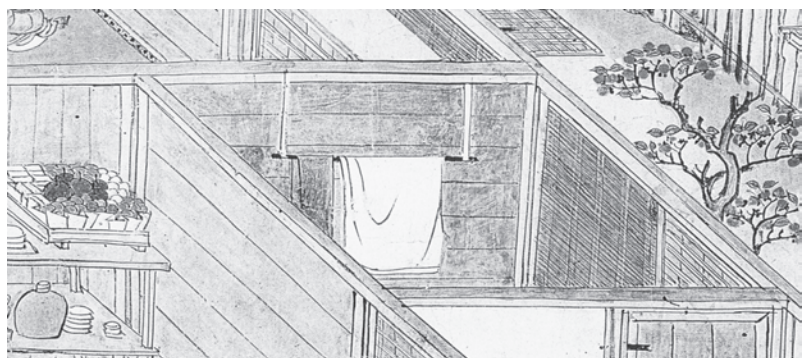


図7 『慕帰絵』巻8第5紙（部分，小松1985）

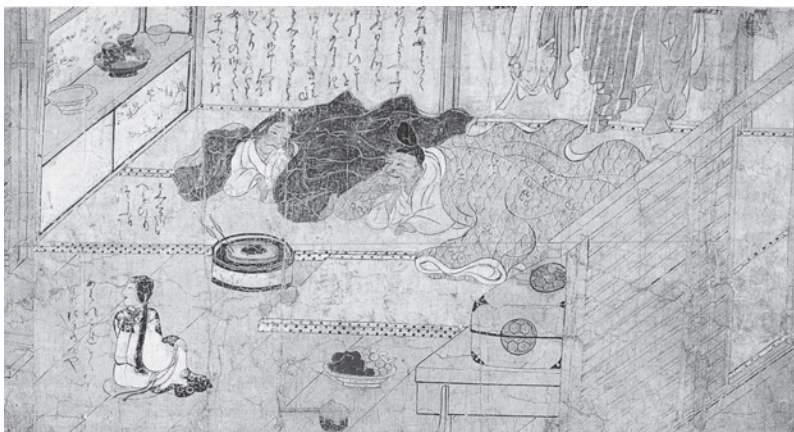


図8 『福富草紙』春浦院本下巻第1紙（小松 1979a）

べり会話を交す場面が描かれているが、背後の壁に沿って吊られた衣類には、4枚の衣類が掛かり、畳をほとんど覆い隠すように広がる秀武と妻それぞれの夜着とあわせて、彼らが手に入れた豊かな生活を表象している（図8）。なお、下巻中盤、放屁芸に失敗し、さんざんな目にあった福富家の様子を描く場面でも、糞にまみれた福富の衣服を掛けた棹が2ヶ所に登場するが（小松 1979a：春浦院本下巻第12紙，第14紙），前者は建物等を描かずに、ただ棹が天から吊されており、また後者は明白⁽⁸⁾に屋外にある木杵から吊されているため、室内装飾の例としては不適である。

⑦『日蓮聖人註画讃』

原本は15世紀頃の成立と目される、日蓮の生涯を描く『日蓮聖人註画讃』では、日蓮の草庵に繰り返し僧服の掛かった1本の棹が描かれている。例えば巻2の第10紙，伊東の配所の草庵の場面では、日蓮の背後に吊された棹に白い衣が掛かり，巻3第17紙，平頼綱の兵の襲撃を受ける場面では、袈裟と衣の掛かった棹を吊っていた右の紐が切れて床に落ち，襲撃の激しさを表現している（図9）。また巻4に描かれる佐渡の配所でも繰り返し棹に掛かった衣が描かれている（第17紙，21紙，26紙，31紙）。これらの場面に描かれる草庵は人物に比して小さく，衣架以外には場面に応じて経巻や仏像，硯等が描かれる程度で，調度品もほとんどない（ただし巻4第31紙には燈台と経机が描かれる）。従って衣架の表現は何らかの意味をもってなされているのであろう。これについてはIV章で触れる。



図9 『日蓮聖人註画讃』本圀寺本巻3第17紙（部分，小松 1993）

『新修日本絵巻物全集』および『日本絵巻大成』シリーズを通覧して，上記の諸例を得た。未収の作品も含めて見落としもあると思うが，ひとまず，鳥居形衣架についてはほとんど描かれていないことが確認できた。また棹については，形状や場面に一定の共通性が伺えそうである。次章以下では，これらの点について若干の考察を加えたい。

Ⅲ 鳥居形衣架の不在

前章で見たように、絵巻物に鳥居形の衣架が描かれている場面は数例にとどまっている。そのうち、『葉月物語絵巻』の例は、物語上（衣架に）掛けられた装束が重要な意味を持つが故に描かれた特異な例と言える。他の2例については、『うたたね草紙』の例については根拠薄弱ながら詞と関連させた洒落である可能性が指摘できるものの、基本的には物語の筋とは直接関係のない背景として描かれているものと考えられる。この他、未見の作品や失われた作品には描かれていた可能性もあるが、几帳や屏風等の他の調度に比べると、ほとんど描かれていないと言ってよいだろう。実際に稀にしか描かれなかったとしても、描かれない理由を考察するのは、証拠のない憶測に過ぎないが、いくつかの可能性を指摘しておきたい。

一つは衣架の置かれた空間が、絵巻の場面になりにくいものであった可能性である。鳥居形衣架は主に上位層の公家が用いた調度であったと思われるが、Ⅰ章で見たように、また『葉月物語絵巻』と『慕婦絵』の例にも伺われたように、帳台や居室の次の間に置かれる場合が多かったようである。その空間は居室や寝所と違い、物語の舞台にはなりにくかったのではないだろうか。

また一つには、他の調度や衣服の描写との兼ね合いの問題が推測される。例えば『源氏物語絵巻』や『寝覚物語絵巻』等では、画面を埋め尽すように御簾や障子、几帳や打出、そして登場人物の衣服が描かれているが、衣架の描写はその中にうまくはまらないものとして避けられていたのかもしれない。

当たり前のことではあるが、絵巻物に描かれているものは、現実を忠実に写したものではない。佐野（1997）は「絵画の文体論」の観点から、複数の絵巻物に繰り返し現れる風俗表現を「慣用句・常套表現」ととらえて分析し、また黒田（1996）は御伽草子の挿絵を題材に絵画のコードについて論じたが、これらの論考からも明らかなように、絵巻物の描写は、少なからず、先行作品によって積み上げられた絵画の世界の約束事によって決定されている。そして描かれるものやその形が約束事によって決まっていることの当然の裏返しとして、ほとんど描かれない事物が存在することが想定されるが、鳥居形の衣架もその一つなのかもしれない。

Ⅳ 棹の描写の意味

一方、もう一つの衣架の形式であった棹の描写は、鎌倉時代以降の作品に例が見出せた。それらを見渡すと、いくつかの共通点が抽出できるようだ。まず棹の形状が確認できる例は全て1本の棹を紐等で吊しており、明白な「二階棹」の例は見当らない。次に、棹のある部屋の主人は、僧侶や女房、京の都市民等であった。これらを全て同列に扱うことには慎重であるべきだろうが、共通点としては下層民でも上層民でもない人々の生活に登場していると言えよう。第三に『伊勢新名所絵歌合』や『春日権現験記絵』、『福富草紙』など、棹のある部屋の用途が明らかな例の多くは寝所である。『融通念仏縁起』の例は産所を描いており例外と言えるが、絵巻物における棹は、僧侶や中流都市民等の部屋、特にその寝所を示す記号である可能性が指摘できるであろう。

これらの例の中でもとりわけ印象的なのが、『福富草紙』の例（図7）である。この場面の衣架が目を引き出すことは、『絵引』において「衣桁」の例として取り上げられ、解説に1頁が割かれているこ

とからもうかがえる（澁澤 1984：第 4 巻 252）。そこでは、『古事類苑』器用部の「衣架」の項目に見えるいくつかの例を引きながら、まず鳥居形衣架について解説して「衣装を衣桁にかけるということは一つの装飾でもあった」ことを述べた後、民間にはこの『福富草紙』に見えるような「一本の竿の両端を紐でくくって吊りさげる」衣桁があるとし（I 章（2）参照）、また「この絵に関するかぎりでは装飾のためのものでなくすっかり実用化されている」とする。確かに衣類は衣架に雑然と掛けられているようであり、『満佐須計装束抄』の記述に見られるような繊細な飾り付けとは到底言えない。が、筆者にはこの衣架が「すっかり実用化されている」だけのものには思われない。

『福富草紙』上巻第 12 紙には、放屁の芸を身につける以前の赤貧生活を送る秀武夫婦の寝所が描かれており、既に指摘されているように、この下巻冒頭と対照的な場面となっている（岡見 1996：145）。その部屋には調度らしきものはなにもなく、壁はむきだし、ただ烏帽子 1 つが戸口にかけられており、夫妻は 1 枚の薄い夜着を共有しているのである。この上巻の寒々とした居室の様子と比較するとき、下巻冒頭に描かれる衣架にかかる衣は、壁の約半分をゆったりとした色とりどりの襷で覆い、暖かく、物に囲まれた豊かな生活を演出する室内装飾の機能を果たしていると言えよう。そして、棹が中流都市民等の寝所を示す記号であるという上述の推測がもし正しければ、下層民の生活から抜け出したことの表象にもなっていると言えるだろう。

さらにこの推測を大胆に押し進めれば、部屋の用途が不明である『西行物語絵巻』、『慕婦絵』、『日蓮聖人註画讃』の例に描かれる棹もまた、そこが寝所であることを示しているのかもしれない。『慕婦絵』については、前述のとおり既に寝室である可能性が指摘されている（澁澤 1984：第 5 巻 146-147；小松 1985：66）。また、『日蓮聖人註画讃』の例は、いずれも一部屋のみのであるから、日蓮の寝所であるということも可能である。いやむしろ、衣架こそがこれらの小さな草庵が日蓮の居室であり祈禱空間であり寝所であることを演出する道具であるのかもしれない。

ただし、僧侶の部屋にかかる棹については、ほとんどの例において衣架以外の調度は無いか少なく、また、衣服もきちんとたたんで掛けられているという、『伊勢新名所絵歌合』や『福富草紙』の例には見えない特徴も指摘できる。このような表現は、質素で整然とした僧侶の生活を表象するものでもあると考えられる。

おわりに

小稿では、衣を掛ける調度である衣架の中世以前のあり方を探る手掛かりを求めて、代表的な絵巻物における衣架の表現を探ってみた。その結果、大きく分けて 2 つの形式が認められる衣架それぞれの例を見出したが、鳥居形の衣架を描く例は少なく、特に平安・鎌倉時代の作品では、物語の進行上描写が必要な 1 例を除き、描写が見当らなかった。一方、長押等から吊す棹形式の衣架は鎌倉時代以降の作品に複数の例を見出すことができた。この結果について、鳥居形衣架に関しては、想像ではあるが、室内で衣架の置かれる位置や、絵巻物の語法のために物語に登場しない可能性を指摘した。また、棹については、僧侶や中流都市民等の寝所を示す記号として機能している可能性があり、またたとえ雑然としているようであっても絵巻物の中では室内装飾としての役割を果たしていることを述べた。

小稿は初歩的な調査の報告であり、見落としている例もあろう。衣架のありかたを探るには、非文字資料の面からは、風俗画等、絵巻以外の史料や指図の見直しも行う必要があり、文字資料の面からは、用例を集め、現在、混乱して用いられている名称を整理し、使用の実態を探らなければならない。また衣架を用いずに室内に衣服をかける例もあり、打出や几帳等、他の布を用いた室内装飾との関係も検討すべきであろう。大方のご叱正を乞う次第である。

注

- (1) 「掛竿」については他に2例あるが、これらは衣を掛ける調度ではなく、店の品物を吊す道具であるため除外した。
- (2) なお、同書の「衣架」の項目は衣桁を参照せよとなっている。
- (3) 読解の便宜のため、引用に際して一部仮名を漢字に改め、また句読点を改めた。
- (4) 『明月記』天福元年(1233)七月一八日条(藤原定家1970)、『経俊卿記』正嘉元年(1257)六月一三日条(藤原経俊1970)等。
- (5) 但し、巻1は室町時代(1482年)の補写である。
- (6) この場面は『絵引』に衣桁の例として取り上げられている(澁澤1984:第3巻134)。
- (7) 巻15第10紙に見える紀伊寺主夫妻の寝室の場面にも右奥の壁に掛かる衣服の裾が見え、同様に衣架に掛かる衣服を表現している可能性がある(小松1982:下巻)。
- (8) 前者は『絵引』に衣紋竹の例として取り上げられている(澁澤1984:第4巻268)。

引用文献一覧

藤原道綱母

1995『蜻蛉日記』(新編日本古典文学全集)東京:小学館。

藤原定家

1970『明月記』東京:国書刊行会。

藤原経俊

1970『経俊卿記』(図書寮叢刊)東京:宮内庁書陵部。

稲本万里子

1988「葉月物語絵巻について(上)」『国華』1112号, pp. 11-26。

川本重雄・小泉和子編

1998『類聚雑要抄指図巻』東京:中央公論美術出版。

小泉和子

1998「調度について」川本重雄・小泉和子編『類聚雑要抄指図巻』pp. 373-389。

小松茂美編

1978a『葉月物語絵巻・枕草子絵詞・隆房卿艶詞絵巻』(日本絵巻大成)東京:中央公論社。

1978b『男衾三郎絵詞・伊勢新名所絵歌合』(日本絵巻大成)東京:中央公論社。

1979a『能恵法師絵詞・福富草紙・百鬼夜行絵巻』(日本絵巻大成)東京:中央公論社。

1979b『西行物語絵巻』(日本絵巻大成)東京:中央公論社。

1982『春日権現験記絵』(続日本絵巻大成)東京:中央公論社。

1983『融通念仏縁起』(続日本絵巻大成)東京:中央公論社。

1985『慕婦絵詞』(続日本絵巻大成)東京:中央公論社。

1993『日蓮聖人註画讃』(続々日本絵巻大成)東京:中央公論社。

久保朝孝

- 1991「葉月物語絵巻」三谷榮一編『物語文学の系譜Ⅲ 鎌倉物語 2』（体系物語文学史），pp. 64-79，東京：有精堂出版。
- 黒田日出男
- 1996「御伽草子の絵画コード論入門」『歴史としての御伽草子』pp. 52-143，東京：ぺりかん社（初出は1990年）。
- 源雅亮
- 1950「満佐須計装束抄」塙保己一編『群書類従』第8輯，pp. 1-89，東京：続群書類従完成会，訂正三版。
- 源順
- 1971『諸本集成倭名類聚抄』京都大学文学部国語学国文学研究室編，京都：臨川書店，増訂再版。
- 紫式部
- 1995『源氏物語』（新編日本古典文学全集）第2巻，東京：小学館。
- Museum of Fine Arts, Boston
- n. d. "Utatane zōshi". *www.mfa.org*. 最終アクセス：2011年6月29日。〈<http://www.mfa.org/collections/object/utatane-z-shi-27189>〉
- 檜崎宗重
- 1957「転寝草子（上）」『国華』786号。
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編
- 2000『日本国語大辞典』東京：小学館，第2版（オンライン版：<http://www.japanknowledge.com>）。
- 西耕生
- 1996「葉月物語絵巻詞書注釈稿（上）」『大阪女子短期大学紀要』21号，pp. 160-150（一一十一）。
- 岡見正雄
- 1996「御伽草紙絵について：十二類合戦絵巻・福富草紙・道成寺縁起絵巻を通じて」『室町文学の世界：面白の花の都や』pp. 120-160，東京：岩波書店（初出は1968年）。
- 佐野みどり
- 1997「絵巻にみる風俗表現の意味と機能」『風流 造形 物語：日本美術の構造と様態』pp. 449-486，東京：スカイディア（初出は1991年）。
- 清少納言
- 1997『枕草子』（新編日本古典文学全集）東京：小学館。
- 澁澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編
- 1984『新版 絵巻物による日本常民生活絵引』東京：平凡社（初版は1964-1968年）。
- 島田修二郎編
- 1981『天神縁起絵巻・八幡縁起・天稚彦草紙・鼠草紙・化物草子・うたたね草紙』（新修日本絵巻物全集）東京：角川書店。
- 鈴木敬三
- 1996「衣桁」『有識故実大辞典』p. 26，東京：吉川弘文館（初出は1979年）。
- 徳川義宣
- 1978「葉月物語絵巻」小松茂美編『葉月物語絵巻・枕草子絵詞・隆房卿艶詞絵巻』，pp. 98-109。
- 米倉迪夫
- 1992「国立歴史民俗博物館蔵「うたたね草紙」」『美術研究』352号，pp. 270-274。